〔研究ノート〕

母性看護実習での男子学生のモチベーションに影響する要因

佐藤　愛[1)]，髙橋　由美子[1)]，寄本　飛鳥[2)]，大井　けい子[2)]

1）青森県立保健大学　2）元青森県立保健大学

要約

本研究の目的は，母性看護実習に対する男子学生のモチベーションに影響を与える要因について明らかにすることである。研究方法は，A 県内の看護系大学（四年制）の母性看護実習を履修した男子学生 15 名を対象にフォーカスグループインタビューを実施し，質的帰納的に分析を行った。その結果，男子学生のモチベーションに影響を与える要因として【男子学生自身の思い】，【妊産婦との関係性】，【スタッフからの関わり】，【新生児との関わり】，【教員からの関わり】，【実習環境】の 6 要因が示された。男子学生のモチベーションに影響する要因からみた，母性看護実習を行う際の教員の支援として，①男子学生の実習に対する思いの理解，②男子学生に対する妊産婦の受け入れ状況の十分な確認，③スタッフと男子学生の関係づくりへの配慮，④男子学生の感動体験と自信を促進する支援，⑤男子学生の孤立感を軽減する支援が求められていると考える。

キーワード：母性看護実習，男子学生，モチベーション

Ⅰ．緒言

1990年度の看護教育カリキュラムの改正により，男女の学習の機会の差をなくすという理念に則り，男女の区別なく母性看護実習が行われるようになった。それ以降，20数年が経つにもかかわらず，依然として，妊産婦の受け入れの困難やケアの実施の制限等，男子学生が母性看護実習を実施する上での課題は山積している現状である[1)2)3)]。実際に男子学生の母性看護実習の実施状況を見ても，女子学生に比べて実習への意欲が低く，妊産婦との関係づくりにおいても緊張が強く非常に苦慮している様子が伺える。それに対して我々教員も，具体的にどのような支援が男子学生の母性看護実習に対するモチベーション（動機付け，やる気を起こさせる内的な心の動き）を高め，より深い学びが得られるのか模索している状況である。

男子学生の母性看護実習の実施に関する先行研究[1～7)]はあるが，内容は男子学生が抱える困難，また男子学生の母性看護実習における学びや意識について言及するものであり，実習に対する男子学生のモチベーションに影響する要因について探求しているものは少ない。母性看護実習に対するモチベーションが高まることで実習に対する困難感が軽減し，学びも深まるのではないかと推測される。

そこで本研究は，母性看護実習に対する男子学生のモチベーションに影響を与える要因について明らかにすることを目的として調査し，それらの要因への対応策を検討したいと考えた。

Ⅱ．方法

1．研究デザイン

本研究は質的帰納的研究である。

2．用語の定義

本研究においてモチベーションとは，『母性看護実習を行うことに対してやる気を起こさせる動機付け』のことをいう。

3．対象の概要

A県内の看護系大学（四年制）の母性看護実習（2単位，90時間，集中実習であり，教員が病棟に常駐する体制をとっている）を履修した男子学生15名。母性看護実習は３年次の配当科目である。複数の実習施設で実習を展開しており，男子学生は各実習グループに１ないし２名が所属し履修している。

4．データ収集方法

男子学生を２グループ（８人，７人）に分けてフォーカスグループインタビューを行った。フォーカスグループインタビューとした理由は，男子学生が話しやすい雰囲気を作ることと，グループダイナミクスにより単独のインタビューでは得られない深く幅広い情報内容を得るためである。インタビューはプライバシーの保たれる個室で実施し，インタビュアは母性看護実習で男子学生を担当していない研究者が担当した。インタビュー内容はICレコーダーに録音した。インタビューの所要時間は２グループとも１時間であった。

5．調査内容

母性看護実習において，学生自身の実習に対するモチベーションに影響したと思われる事柄について

連絡先：青森県立保健大学 健康科学部 看護学科　佐藤愛（m_sato@auhw.ac.jp）

半構造化面接を行った。
1）母性看護実習へのモチベーションを向上させる上で効果的と感じたスタッフ（病棟や外来の助産師または看護師）や受け持ち妊産婦の言動・支援
2）母性看護実習へのモチベーションを向上させる上で効果的と感じた教員の言動・支援
3）母性看護実習へのモチベーションが阻害されたと感じたスタッフや受け持ち妊産婦の言動・支援
4）母性看護実習へのモチベーションが阻害されたと感じた教員の言動・支援
5）母性看護実習へのモチベーションを向上または阻害したと思う上記以外の事柄
6）母性看護実習に臨む上で教員に要望すること

6．データ分析方法

ICレコーダーに録音した内容を逐語録に起こし，内容を繰り返し読み込んだ。次に逐語録の内容から男子学生の実習に対するモチベーションに影響したと思われる内容について語られている部分を意味のある分節ごとに抽出し，コード化した。次にコード間の類似性と相違性，関連性を検討してサブカテゴリーとした。その後サブカテゴリーの内容の類似したものをまとめ，最終的に男子学生のモチベーションに影響したと考えられる要因をカテゴリー化した。

データ分析は質的研究に精通している研究者にスーパーバイズを受けて信頼性の確保に努めるとともに，母性看護学に精通している研究者で分析に偏りがないかメンバーチェッキングを行いながら検討することで妥当性の確保に努めた。

7．データ収集期間

平成27年３月３日～７日

8．倫理的配慮

研究への協力依頼を大学内に掲示し対象者を募集した。研究対象者への人権擁護については，面接前に倫理的配慮を記述した書面（研究目的，研究内容，研究期間，研究への参加・協力の自由意志，拒否権，プライバシーの保護，個人情報の保護の方法，データの収集・管理・破棄方法）を対象者に渡し，口頭で同意を確認するとともに同意書を作成し，研究者と研究対象者双方で保管した。なお本研究は青森県立保健大学の研究倫理委員会の承認（承認番号1434）を得て実施した。

Ⅲ．結果

モチベーションに影響する要因として６カテゴリーと33サブカテゴリーが抽出された。

以下，カテゴリーは【　】，サブカテゴリーは〈　〉，コードを「斜体」で示す。

また研究者が補った部分を（　）で示す。カテゴリー名の後の数字はコード数を示す。

1．【男子学生自身の思い】(47)

母性看護実習に対する男子学生のモチベーションは，学生自身が抱く実習への様々な思いによって影響を受けていた。モチベーションを高めるサブカテゴリーは〈母性看護実習への期待感〉〈他の学生との情報共有による不安の軽減〉〈できることが限られていることによる気楽さ〉〈母性看護実習での楽しさを実感できる〉〈自分から距離を作っていたことへの気づき〉であった。またモチベーションを低下させるサブカテゴリーは〈母性看護実習をイメージできないことによる戸惑い〉〈将来につながるイメージが持てない母性実習〉〈妊産婦に不安を与えるのではないかという恐れ〉〈女性にケアを行う気まずさ〉〈妊婦にケアをすることの難しさ〉〈妊産婦にケアをすることへの抵抗感〉〈臨床と学んだことのギャップ〉〈女子学生より意欲が低いと思われることへの心配〉〈女子学生の方が適任であるという思い〉〈学習不足による後ろめたさ〉〈男子学生が実習することの夫への気兼ね〉〈実習で何もできない焦り〉であった。

*「新生児に会えるのも楽しみだったし，今まで話したことのない妊婦さんや褥婦さんと話せるのもすごく楽しみにしながら実習に行った」，「子どもが出来た時に使える技術ではないかと思って，そういう意味でいい体験ができるのではないかという期待を持って実習に行った」*などの〈母性看護実習への期待感〉は実習前のモチベーションを高めていた。また*「(既に母性実習を終えている他の男子学生からの事前の）アドバイスがあったから，母性領域が頑張れた」*などの〈他の学生との情報共有による不安の軽減〉，*「男子学生は授乳を見られないなど，できることが少ないと聞いていたので（精神的重圧が少なく実習ができるため）いいなと思った」「先輩からやることは少ないと話を聞いていたので気楽にやれると思った」*などの〈できることが限られていることによる気楽さ〉も同様に，実習前のモチベーションを高めていた。

実習中では*「自分の事例を取り上げてカンファレンスすることになって，みんなの学びになる事例を受け持つことができて，みんなの前で発表できて，男子でも母性実習に参加している（と実感できた)」「授乳を見せて頂いたり胎盤も触らせてもらい，新しい発見がものすごく多くて楽しいなって思った」*などの〈母性看護実習での楽しさを実感できる〉ことがモチベーションを高めていた。また*「(褥婦は）性を意識しているのではなく，自分のために（授乳を）見せてくれている，（だから）自分から避けるのはやめようと（気づいた)」「(授乳見学には）自分も抵抗があって距離を置いていたことに気づけた」*という〈自分から距離を作っていたことへの気づき〉がモチベーションを高めていた。

一方で実習前の*「女性特有の（心身の）過程を看護していく病棟なので，男性としては（妊娠・分娩を）体験することは絶対にないので，どう関わっていけばいいのか（わからない)」「性別の違う自分に何ができる看護かわからない」「母性で何を事前学習していけばいいのか（実習がイメージできず）どう勉強していいのかがわからなかった」*などの〈母

性看護実習をイメージできないことによる戸惑い〉がモチベーションを低下させていた。また「(男子が)就職できない領域なので事前学習のモチベーションが上がらない」「病棟には男性看護師がいないので実習が将来につながらない」などの〈将来につながるイメージが持てない母性実習〉や,「初めての妊娠で不安があるのに男子学生がつくことでさらに不安にさせるかもしれない」「自分が受け持つことで(入院中の)生活スタイルの邪魔をするかもしれないと不安である」など〈妊産婦に不安を与えるのではないかという恐れ〉も同様にモチベーションを低下させていた。

実習中では「年齢の近い女性に触診や視診をするのは気まずく,どう対応すればいいかわからない」「女性に関わらなければならず,どうやっていけばいいかわからない」などの〈女性にケアを行う気まずさ〉,「腹部触診で力が強く痛いと言われ,妊婦に危険を与えるのではないかとケアの難しさを実感する」といった〈妊婦にケアをすることの難しさ〉,「外来で半強制的に妊婦の触診や計測をすることに抵抗が大きい」などの〈妊産婦にケアをすることへの抵抗感〉がモチベーションを低下させていた。また「助産師は子宮底測定を触診なしの一発で行うが,自分は第2胎向だったらここで(胎児心音を)聴くとか考えるので,実際に助産師がやるのと学んだ方法はちょっと違う」という〈臨床と学んだことのギャップ〉,「女子学生の方が意欲が強く,教員から女子学生と比較して意欲が低いと思われているかもしれない」という〈女子より意識が低いと思われることへの心配〉,「男子よりもっとケアができるので,女子が受け持つ方が(妊産婦にとって)良いのではないかという思いがある」という〈女子学生の方が適任であるという思い〉,「事前に学習ができていれば,もっと自分の学習にプラスになるような実習ができたと思うし,見せて頂いた方(褥婦)に申し訳ない,学習不足で申し訳ないっていう気持ちだった」という〈学習不足による後ろめたさ〉,「夫が入れない処置に男子学生が入ることに対する夫への気兼ねがあった」という〈男子学生が実習することの夫への気兼ね〉,「実習に来ているのに(見学を断られて)何もしてないでいいのかみたいな焦りがあった」という〈実習で何もできない焦り〉がモチベーションを低下させていた。

２.【妊産婦との関係性】(８)

受け持ちの妊産婦から受け入れられるか否かが,実習中の男子学生のモチベーションに影響していた。モチベーションを高めるサブカテゴリーは〈妊産婦から受け入れられる安堵感〉〈妊産婦から自分のケアを受け入れられる喜び〉であった。またモチベーションを低下させるサブカテゴリーは〈妊産婦から受け入れられないことによる落胆〉であった。

「(授乳の際)自分たちのことを考えて見学などを承諾してくれたことに気持ちが楽になった」「快く承諾してもらえることで気が楽になる」などの〈妊産婦から受け入れられる安堵感〉がモチベーションを高めていた。また「妊婦さんに毎日ツボマッサージをやっていたら上手くなってきたねと言われて嬉しかった」「(足浴前は何も喋ってくれなかった妊婦が)足浴をして表情が和らぎ,そこから会話が広がって達成感を感じられた」という〈妊産婦から自分のケアを受け入れられる喜び〉もモチベーションを高めていた。一方で「訪室時に妊婦の“また来たんだ”みたいな気怠そうな反応に気後れする」「授乳見学を断る褥婦に共感しつつも落胆する」などの〈妊産婦から受け入れられないことによる落胆〉がモチベーションを低下させていた。

３.【スタッフからの関わり】(９)

臨床スタッフの実習での対応が,実習中の男子学生のモチベーションに影響していた。モチベーションを高めるサブカテゴリーは〈スタッフの熱心な指導による学びの促進〉〈スタッフの気遣いによる嬉しさ〉であった。またモチベーションを低下させるサブカテゴリーは〈スタッフからの叱責による落胆〉であった。

「母性領域の特殊なことばかりでなく,報告などの基礎的なことも指導してくれて学ぶことができた」「沐浴方法を熱心に教えてくれて,(実習を)楽しめた」「(スタッフの)サポートのおかげで今までと違った視点から看護介入できるようになった」などの〈スタッフの熱心な指導による学びの促進〉がモチベーションを高めていた。また「(男子学生として産科病棟での実習に)不安があると話したら共感してくれるような声掛けをしてくれてすごく嬉しかった」「(女子よりも)男子学生の方が沐浴が上手いと褒められ,成功体験として楽しかった」という〈スタッフの気遣いによる嬉しさ〉もモチベーションを高めていた。一方で「(モデルでは練習していたが)外来でレオポルド触診が上手くできず厳しく叱られた」という〈スタッフからの叱責による落胆〉がモチベーションを低下させていた。

４.【新生児との関わり】(３)

実習中に新生児を見たり触れたりすることや新生児の反応が男子学生のモチベーションに影響していた。モチベーションを高めるサブカテゴリーは〈沐浴が上手くできた感動〉〈生まれたての新生児を見た喜び〉であった。またモチベーションを低下させるサブカテゴリーは〈新生児の反応が女子学生と違うと感じる〉であった。

「沐浴中に新生児を泣き止ませることができて感動した」という〈沐浴が上手く出来た感動〉や,「(受け持ち妊婦が出産し,生まれた)新生児をみて,あーいいなあっていう感覚になった」という〈生まれたての新生児を見た喜び〉がモチベーションを高めていた。一方で「男子学生の声を聞いた新生児の反応を見て,女子学生の時と違うと感じ怖いと思われているのではないかと感じた」という〈新生児の反応が女子学生と違うと感じる〉ことがモチベーションを低下させていた。

５．【教員からの関わり】（９）

実習中の教員の対応は男子学生のモチベーションに影響していた。モチベーションを高めるサブカテゴリーは〈教員からの後押しによる自信の獲得〉〈教員の見守りによる心強さ〉〈コミュニケーションのしやすさ〉であった。

*「(褥婦とどのように関わるかという悩みの相談に）教員が背中を押してくれて不安が大きくならず楽しめた」*などの〈教員からの後押しによる自信の獲得〉や，*「学生全体に目を向けてくれているのを知って安心というより心強かった」「(新生児の観察をしている時に）近くで見てくれて，わからないこともすごく丁寧に教えてくれることが心強かった」*という〈教員の見守りによる心強さ〉がモチベーションを高めていた。また*「(実習で悩んだ時に）相談がすぐできて話しやすくてよかった」「すごく話を聞いてくれる，笑顔で聞いてくれるのでコミュニケーションに不自由しなかった」*などの〈コミュニケーションのしやすさ〉がモチベーションを高めていた。

６．【実習環境】（７）

母性看護実習の環境は男子学生のモチベーションに影響していた。モチベーションを高めるサブカテゴリーは〈実習グループに同性がいることによる緊張の緩和〉であった。またモチベーションを低下させるサブカテゴリーは〈女性が多い病棟という居心地の悪さ〉〈受け持ちがいないことによる実習の困難さ〉〈病室が個室であることの入りづらさ〉であった。

*「実習グループに（自分の他に）もう一人男子学生がいると緊張が和らぐ」*という〈実習グループに同性がいることによる緊張の緩和〉がモチベーションを高めていた。一方で，*「(産科病棟は）女性がほとんどなので自分としては居づらい感じがある」「女性が多く他の病棟と違って男性看護師がいないので心細い」*などの〈女性が多い病棟という居心地の悪さ〉や，*「一人も受け持ちを持つことができずへこんだ」「受け持ちがいなかったので（実習記録に）何も書くことがなくて苦労した」*という〈受け持ちがいないことによる実習の困難さ〉，*「個室のためドアが閉まっているので他の病棟とは違い入りづらかった」*という〈病室が個室であることの入りづらさ〉がモチベーションを低下させていた。

Ⅳ．考察

本研究結果から，母性看護実習に対する男子学生のモチベーションに影響する要因として【男子学生自身の思い】【妊産婦との関係性】【スタッフからの関わり】【新生児との関わり】【教員からの関わり】【実習環境】の６つが示された。またこれらの要因にはモチベーションを高める要因と低下させる要因が含まれていた。これらの結果から男子学生の母性看護実習に対するモチベーションを高めるには，高める要因を促進し，低下させる要因への対策を検討することが求められると考える。ここでは特にモチベーションを低下させる要因を中心に考察する。

１．男子学生自身の思いや体験への支援

先行研究では，母性看護実習に対する男子学生自身が抱える葛藤や問題として，対象に拒否されるのではないかという恐れや「自分は異性である」という過剰意識[7]，妊産婦やその夫に不快な思いをさせるのではないかという不安[1)8)]，母性看護実習に対する意義を見いだせないこと[1)2)]，妊産婦や病棟スタッフからどう見られているのかということへの不安[1)7)]などが示されている。本研究結果においてもモチベーションを低下させる要因として〈妊産婦に不安を与えるのではないかという恐れ〉〈将来につながるイメージが持てない母性看護実習〉〈女子学生より意欲が低いと思われることへの心配〉など同様の内容が示された。母性看護実習に対して男子学生が抱える葛藤や問題がそのまま実習へのモチベーションを低下させる要因に直結していることがわかる。母性看護実習は妊娠・分娩・産褥という女性特有の心身の変化に対する看護を学ぶ場であることから，男子学生にとっては性の違いにより理解するのが困難であり，女性へのケアを男性である自分が行うということに強い戸惑いや不安を抱くと推測される。また乳房の観察や内診の介助などで見学や実施が受け持ち妊産婦から許可されない[2)3)]ことから，受け持ち妊産婦の心身の変化のイメージがしにくく看護介入もしにくいという実習上の困難がある。さらに産科病棟には学生のモデルとなる男性看護師がいないという環境上の困難もある。このことが，男子学生が母性看護実習を行う上での「自分たちの大変さが理解されていない」「女性の多い病棟で孤立している」という感情に繋がりモチベーションにも影響したのではないかと推察される。実習での男子看護学生に特有のストレッサーとして性差による孤立感が示されている[2)]ことからも，男子学生の「理解されていない」「孤立している」という感情を少しでも緩和できるような支援が求められていると考える。そのためには妊産婦との関係の調整や学生配置の配慮，男子学生の孤立感に病棟スタッフや教員が共感を示すなどの支援が必要と考える。

２．妊産婦との関係づくりへの支援

先行研究では受け持ちからの見学および援助への拒否[3)9)]や褥婦への関わりにくさ[6)]が男子学生の実習に対する困難として示されている。本研究でも〈妊産婦から受け入れられないことによる落胆〉がモチベーションを低下させる要因であり同様の結果であった。妊産婦との関係性に対する困難感が，本研究において考察１で述べた男子学生自身の孤立感へとつながり，モチベーションを低下させたと推測される。妊産婦から自分が受け入れられるかどうかは，女子学生にも同様に実習へのモチベーションを左右しうると考えるが，男子学生の場合は「自分が男性だから拒否された」という思いがあり，女子学生以上にモチベーションに影響を与えると推測される。

先行研究では男子学生にとって母子との対人関係の構築の良否が学生の実習意欲を左右することが指摘されている[5)10)]。一方受け持ちとなることを承諾した妊産婦は，学生の一生懸命さに好感を持つ[8)11)]ことが示されており，学生自身の実習に対する姿勢が妊産婦の受け入れに影響している。教員や実習指導者は，母性看護実習での男子学生のモチベーションには妊産婦からの受け入れ状況が大きく影響することを十分に認識した上で，妊産婦の気持ちにも配慮しながら，受け持ち妊産婦の選定や受け持ち後の関係性の確認および支援を行っていくことが求められると考える。

３．スタッフとの関係づくりへの支援

本研究では〈スタッフからの叱責による落胆〉がモチベーションを低下させる要因として示された。本研究結果での学生が叱責を受けた理由は，外来でのレオポルド触診が上手くできなかったことである。男子学生にとって妊婦の身体に触れる援助は緊張や不安を増強させるものである。たとえ事前に妊婦に了解を得ていたとしても，自分の触診の技術の拙さによって妊婦を不快にさせてしまうのではないか，と男子学生は常に緊張と不安を抱えている[1)4)]。そのような場において，スタッフから妊婦の目の前で叱責を受けたことで『やっぱり上手くできなかった』『妊婦に不快な思いをさせてしまった』という思いが湧き，モチベーションが低下したのではないかと推測される。一方で，母性看護実習の実習指導を行う助産師には母性看護ならではの学びを伝えたい想いがあると同時に，母子を対象とする看護を指導する上での困難や葛藤[12)]があることも示されている。教員は，男子学生が抱えている緊張や不安な気持ちに配慮すると同時に，このようなスタッフの想いや葛藤にも目を向け，互いに情報共有をしながら，スタッフと男子学生の良好な関係性を支援していくことが求められていると考える。

４．新生児のケア時の支援

本研究では新生児を目にすることや沐浴による成功体験がモチベーションを高め，女子学生との新生児の反応の違いを感じることでモチベーションが低下するという結果であった。学生の苦手意識が変化する要因として共感や感動体験が示唆されている[13)]。学生は受け持ちの妊婦が分娩し，生まれた新生児を実際に目にすることで生命の誕生に感動したり，沐浴時に新生児を泣きやませることができたことに感動していた。これらの感動体験は男子学生の苦手意識に変化を与え，さらにモチベーションにも影響したと考える。男子学生にとって妊産婦への直接的なケアは拒否等により機会が制限されることがあり自信をもつことが難しい。しかし，新生児のケアでは比較的複数回を経験できることから新生児の観察に自信が持てるようになることや，新生児への愛着をもつなど[4)]肯定的な体験ができる学習内容であると推測される。逆に新生児のケアで自信を損なうような体験はモチベーションの低下につながりやすいとも言える。男子学生にとって新生児のケアは感動体験や自信につながりやすいと考えられ，これらを考慮した支援を行うことがモチベーションを高めることに繋がると推測される。

５．教員による支援

本研究ではモチベーションを高める要因として〈コミュニケーションのしやすさ〉や〈教員の見守りによる心強さ〉，〈教員からの後押しによる自信の獲得〉が示された。男子学生が自由に語ることができるように，インタビューは男子学生を担当していない母性看護領域の教員が行うように配慮したが，モチベーションを低下させる要因は語られなかった。しかし，教員の関わりに対して男子学生が抱えるストレッサーとして，先行研究では「女性教員が男性の立場や心情を理解してくれない」「女性教員が男子学生の対応に戸惑っている」「女性教員がケアに介入してくれない」[2)]といった内容が示されている。このことを本研究結果と合わせて考えると，母性看護実習において男子学生がもつ葛藤や戸惑い，緊張，不安といった心情を話しやすい雰囲気をつくることが教員に求められていると推測される。さらに，男子学生は他者から肯定される経験を通して，「苦手意識」を「得意」へと変化させている[13)]ことから，男子学生の実習に対するモチベーションを高める上では教員からの肯定的な関わりが重要と考える。男子学生がケアを行っている様子を教員が見守り，「できていること」に対してはポジティブな評価を意識的かつ積極的に投げかけることで，学生が自信をもてるように関わることが求められていると推測される。考察４でも述べたように，自信をもてるような体験への支援が男子学生のモチベーションにとって重要と考える。

６．実習環境からみた支援の必要性

実習環境では〈女性が多い病棟という居心地の悪さ〉，〈受け持ちがいないことによる実習の困難さ〉，〈病室が個室であることの入りづらさ〉がモチベーション低下の要因として示された。これらの要因は前述した男子学生のもつ孤立感に関連する要因であると考える。男子学生の孤立感は，〈実習グループに同性がいることによる緊張の緩和〉が示されていることからも裏付けられる。同じ境遇にある男子学生が同じ病棟で実習しているという環境は，男子学生の孤立感を緩和すると推測される。実習における人間関係や環境へのネガティブな感情はモチベーションに影響する[14)]ことから，可能であれば複数の男子学生が同じ場所で実習できるような配置を考慮する[2)]などの支援も必要と考える。また男子学生は実習指導者や教員，グループメンバーなど周囲からの支えを実感することによって安心して自信を持って実習に取り組める[14)]ことから，教員は実習グループメンバー内の良好で協力的な関係性が構築されるように配慮していく必要がある。

Ⅴ．研究の限界と今後の課題

本研究は対象者が１大学の15名であり，一般化することは難しい。今後，対象を広げることで本結果の検証をしていくことが課題である。

Ⅵ．結論

本研究により，男子学生のモチベーションに影響を与える要因として【男子学生自身の思い】，【妊産婦との関係性】，【スタッフからの関わり】，【新生児との関わり】，【教員からの関わり】，【実習環境】の６要因が示された。男子学生のモチベーションに影響を与える要因への対策として，特に男子学生の孤立感の軽減や自信が持てる関わり，妊産婦からの受け入れ状況を十分に確認すること，男子学生とスタッフの関係づくりに向けた支援が重要であることが示唆された。

引用文献

１）荒川直子：母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難. 日本看護学会論文集　看護教育, 38, 123－125, 2007

２）三宅順, 近藤大貴, 奥山真由美：男子看護学生に特有の臨地実習におけるストレッサーと対処行動. 日本看護学会論文集　看護教育, 40, 30－32, 2009

３）高橋順子, 高野みち子, 雑賀美智子：女子看護学生との比較からとらえる男子看護学生が感じている学習上の困難－看護専門学校三年課程の看護学生の記述内容分析から－. 四国大学紀要, A（人文・社会科学編）33, 161－168, 2010

４）畠中佳織, 峯馨, 林ひろみ：母性看護実習における男子学生の実習前・実習中・実習後の体験. 千葉県立衛生短期大学紀要, 26(1), 89－95, 2007

５）川村千恵子, 井端美奈子, 田原町子：男子学生の母性看護実習に伴う経験. 大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要, 9, 1－7, 2004

６）村井俊介，高橋ゆかり：男子学生の母性看護学実習における困難－今後の母性実習のあり方を考える－. 茨城県母性衛生学会誌, 25, 67－71, 2005

７）尾崎洋子, 木川富枝, 花田待子ら：母性看護学実習で男子学生が感じる困難. 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 6, 27－39, 2010

８）伊藤千恵, 松井幸子, 大野絢子ら：男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察. 群馬パース大学紀要, 6, 81－89, 2008

９）礒山あけみ, 川那子清美, 枝川信子：看護学科２年課程における母性看護学実習の現状－男子学生と女子学生の実習到達度及び実習に対する認識からの考察－. 茨城県母性衛生学会誌, 25, 72－77, 2005

10）小倉由紀子，谷口美智子：Ａ大学の母性看護学実習前における学生の自律的欲求・仮想的有能感・学習の動機づけの特徴と男女比較. 中京学院大学看護学部紀要, 5(1), 17－26, 2015

11）都竹友季子, 野田貴代, 出口睦雄：母性看護学実習における褥婦の意識調査－学生に受け持たれることが褥婦に与える影響について－. 愛知きわみ看護短期大学紀要, 7, 117－123, 2011

12）小林美穂：助産師である実習指導者が母性看護学実習の実習指導に抱く想い－Ａ施設におけるインタビューより－. 日本赤十字看護学会誌, 16(1), 47－52, 2016

13）川由京子, 佐々木弘美, 佐々木智恵子ら：母性看護学実習前後の看護学生の苦手意識の変化，島根母性衛生学会雑誌, 14, 71－76, 2010

14）石川恵子，内海桃絵：看護学生における臨地実習へのモチベーション. 健康科学　京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要, 11, 11－16, 2016

表1　男子学生のモチベーションに影響する要因(1)　(下線なしは高めるサブカテゴリー，下線は低下させるサブカテゴリーを示す。)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
男子学生 自身の思い	母性看護実習への期待感	新生児に会えるのも楽しみだったし，今まで話したことのない妊婦さんや褥婦さんと話せるのもすごく楽しみにしながら実習に行った
		子どもが出来た時に使える技術ではないかと思って，そういう意味でいい体験ができるのではないかという期待を持って実習に行った
		男性が看護師になっても母性の病棟に行ける訳ではないので，貴重な(体験ができる)実習だと考えた
	他の学生との情報共有による不安の軽減	(既に母性実習を終えている他の男子学生から実習で) 実際にやることを聞いていたので，そこまで不安はなかった
		(既に母性実習を終えている他の男子学生からの事前の) アドバイスがあったから，母性領域が頑張れた
	できることが限られていることによる気楽さ	男子学生は授乳を見られないなど，できることが少ないと聞いていたので (精神的重圧が少なく実習ができるため)いいなと思った
		先輩から何も出来なかったと聞いていたので気楽だった
		先輩からやることは少ないと話を聞いていたので気楽にやれると思った
	母性看護実習での楽しさを実感できる	時間がない中で上手く洗うことができた(沐浴できた)ので良かった
		たくさん沐浴をして将来につながると感じ楽しめた
		自分の事例を取り上げてカンファレンスすることになって，みんなの学びになる事例を受け持つことができて，みんなの前で発表できて，男子でも母性実習に参加している (と実感できた)
		勉強したことが身についている感覚があり，母性看護実習が楽しかった
		授乳を見せて頂いたり胎盤も触らせてもらい，新しい発見がものすごく多くて楽しいなって思った
		褥婦と話をしたり，赤ちゃんの沐浴するのが楽しい
		(足浴を) 精神的な部分で関われたらいいのではないかと思って，落ち着かせるためにアロマを入れて(工夫して)考えて関われたのが良かった
	自分から距離を作っていたことへの気づき	(褥婦は)性を意識しているのではなく，自分のために(授乳を)見せてくれている，(だから)自分から避けるのはやめようと(気づいた)
		(授乳見学には)自分も抵抗があって距離を置いていたことに気づけた
	母性看護実習をイメージできないことによる戸惑い	褥婦のケアがどこまでできるのか曖昧でわかっていない
		女性特有の(心身の)過程を看護していく病棟なので，男性としては(妊娠・分娩を)体験することは絶対にないので，どう関わっていけばいいのか(わからない)
		ウエルネスの視点で，疾患のない人に何ができる看護かわからない
		授業を受けて男子ができることは無いのではないか，何ができるんだろうという，不透明な感じである
		性別の違う自分に何ができる看護かわからない
		男子に何ができるのかわからず強い不安がある
		男子で何もすることがない時間にどうすればいいかわからない
		母性で何を事前学習していけばいいのか(実習がイメージできず)どう勉強していいのかがわからなかった
	将来につながるイメージが持てない母性実習	(男子が)就職できない領域なので事前学習のモチベーションが上がらない
		病棟には男性看護師がいないので実習が将来につながらない
		臨床で妊産婦を受け持つことがなく実習が将来につながらない
		産科病棟で働くことがないので実習が将来につながらない
	妊産婦に不安を与えるのではないかという恐れ	初めての妊娠で不安があるのに男子学生がつくことでさらに不安にさせるかもしれない
		妊婦からの信頼感が得られていないのに受け持つことで不安にさせるかもしれない
		自分が受け持つことで(入院中の)生活スタイルの邪魔をするかもしれないと不安である
		(外来で初めて会った男子学生に)いきなりお腹を触られるのは嫌じゃないかと思う
		(自分のケアのまずさによって褥婦に不安を与えてしまうことで) 今まで築いてきた褥婦との関係性が崩れることに不安がある
	女性にケアを行う気まずさ	年齢の近い女性に触診や視診をするのは気まずく，どう対応すればいいかわからない
		授乳という性的な部分が中心のケアで何もできない
		女性に関わらなければならず，どうやっていけばいいかわからない
	妊婦にケアをすることの難しさ	腹部触診で力が強く痛いと言われ，妊婦に危険を与えるのではないかとケアの難しさを実感する
	妊産婦にケアをすることへの抵抗感	自分に年齢の近い褥婦へのケアに抵抗がある
		自分からも(妊産婦に)行けないし，他病棟と違い男性には壁がある場所である
		外来で半強制的に妊婦の触診や計測をすることに抵抗が大きい
	臨床と学んだことのギャップ	助産師は子宮底測定を触診なしの一発で行うが，自分は第2胎向だったらここで(胎児心音を)聴くとか考えるので，実際に助産師がやるのと学んだ方法はちょっと違う
	女子学生より意欲が低いと思われることへの心配	女子学生の方が意欲が強く，教員から女子学生と比較して意欲が低いと思われているかもしれない
	女子学生の方が適任であるという思い	男子よりもっとケアができるので，女子が受け持つ方が(妊産婦にとって)良いのではないかという思いがある
	学習不足による後ろめたさ	事前に学習ができていれば，もっと自分の学習にプラスになるような実習ができたと思うし，見せて頂いた方(褥婦)に申し訳ない，学習不足で申し訳ないっていう気持ちだった
	男子学生が実習することの夫への気兼ね	夫が入れない処置に男子学生が入ることに対する夫への気兼ねがあった
	実習で何もできない焦り	実習に来ているのに(見学を断られて)何もしてないでいいのかみたいな焦りがあった

表２　男子学生のモチベーションに影響する要因（２）（下線なしは高めるサブカテゴリー，下線は低下させるサブカテゴリーを示す。）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
妊産婦との関係性	妊産婦から受け入れられる安堵感	授乳の見学をすごく快く承諾してくれた
		（授乳の際）自分たちのことを考えて見学などを承諾してくれたことに気持ちが楽になった
		快く承諾してもらえることで気が楽になる
	妊産婦から自分のケアを受け入れられる喜び	妊婦さんに毎日ツボマッサージをやっていたら上手くなってきたねと言われて嬉しかった
		（足浴前は何も喋ってくれなかった妊婦が）足浴をして表情が和らぎ，そこから会話が広がって達成感を感じられた
	妊産婦から受け入れられないことによる落胆	訪室時に妊婦の“また来たんだ”みたいな気怠そうな反応に気後れする
		授乳見学を断る褥婦に共感しつつも落胆する
		男子学生とわかると実習を断られることに落胆する
スタッフからの関わり	スタッフの熱心な指導による学びの促進	母性領域の特殊なことばかりでなく，報告などの基礎的なことも指導してくれて学ぶことが出来た
		沐浴方法を熱心に教えてくれて（実習を）楽しめた
		（スタッフに）本があるから調べてと声をかけてもらい，（調べるのを）待ってくれたので実習を頑張ろうと思った
		ケアで悩み相談した時ツボなどを教えてもらいケアに取り入れることができて学ぶことができた
		（スタッフの）サポートのおかげで今までとは違った視点から看護介入できるようになった
		（スタッフが参考になる本を貸してくれて）明日の処置があるから見てきてとサポートしてもらい勉強しようと思った
	スタッフの気遣いによる嬉しさ	（男子学生として産科病棟での実習に）不安があると話したら共感してくれるような声がけをしてくれてすごく嬉しかった
		（女子よりも）男子学生の方が沐浴が上手いと褒められ，成功体験として楽しかった
	スタッフからの叱責による落胆	（モデルで練習していたが）外来でレオポルド触診が上手くできず厳しく叱られた
新生児との関わり	沐浴が上手くできた感動	沐浴中に新生児を泣き止ませることができて感動した
	生まれたての新生児を見た喜び	（受け持ち妊婦が出産し，生まれた）新生児をみて，あーいいなぁっていう感覚になった
	新生児の反応が女子学生と違うと感じる	男子学生の声を聞いた新生児の反応を見て，女子学生と違うと感じ「怖い」と思われているのではと感じた
教員からの関わり	教員からの後押しによる自信の獲得	（褥婦とどのように関わるかという悩みの相談に）教員が背中を押してくれて不安が大きくならず楽しめた
		実習記録に教員からのよいフィードバックがあり嬉しかった
		実習中に資料をもらい母性実習の意義を知ることができた
	教員の見守りによる心強さ	学生全体に目を向けてくれているのを知って安心というより心強かった
		（新生児の観察をしている時に）近くで見てくれて，わからないこともすごく丁寧に教えてくれることが心強かった
	コミュニケーションのしやすさ	教員が落ち着いていて，対象者とのコミュニケーションなどの相談ができてよかった
		（実習で悩んだ時に）相談がすぐできて話しやすくてよかった
		すごく話を聞いてくれる，笑顔で聞いてくれるのでコミュニケーションに不自由しなかった
		何を聞いてもらうにしても表情が穏やかで圧迫感がない
実習環境	実習グループに同性がいることによる緊張の緩和	実習グループに（自分の他に）もう一人男子がいると緊張が和らぐ
	女性が多い病棟という居心地の悪さ	（産科病棟は）女性がほとんどなので自分としては居づらい感じがある
		特に母性実習は女性がほとんどなのでちょっとやりづらさがあった
		女性が多く他の病棟と違って男性看護師がいないので心細い
	受け持ちがいないことによる実習の困難さ	一人も受け持ちを持つことができずへこんだ
		受け持ちがいなかったので（実習記録に）何も書くことがなくて苦労した
	病室が個室であることの入りづらさ	個室のためドアが閉まっているので他の病棟とは違い入りづらかった